

南総里見八犬伝

五

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店



南総里見八犬伝

五

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八大伝 (全一〇冊)

一九八五年三月一五日 第一刷発行
一九八五年七月二五日 第二刷発行

定価二六〇〇円

校訂者 小池藤五郎

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六六・四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004315-3

解 説

滝沢家の祖先は馬琴から四代前の大右衛門と呼ぶ人物からはっきりする。大右衛門の子の運兵衛興也(馬琴の曾祖父)は、松平信綱(武蔵国川越城主)の四男松平頼母堅綱に仕えて家老となり、五十石と月俸五人扶持を給与された。運兵衛には子がなく、養女の菊(幕府御用達御桶大工棟梁、鈴木四郎右衛門の娘)に武蔵国埼玉郡川口村の郷土真中治介の二男を婿として家を継がせ、興吉(馬琴の祖父)と呼んだ。主家が千石の禄であるから家老もまことに僅かな禄高であった。

興吉は多病で職を辞したが、彼が返上した禄の中から二人扶持を隠居扶持として給与され、その子の桑之助を近習に使われた。それ故、生活は相当に苦しかったらしい。興吉は万事に細かな人で、日記なども詳細に記した。馬琴の緻密さは、こうした祖父の遺伝かと思われる。

vii 解 説

興吉に四男二女があった。長男興臧(馬琴の父)は主家からの禄が少なく、滝沢家が家老の家柄なのに家老は市川与市で、自分はその下に置かれたため、小笠原長恭(陸奥国棚倉城主)の家臣松沢文九郎の養女の門(実は吉尾門左衛門の娘)の婿となり、松沢大右衛門と号して小笠原家に仕えた。彼は養家の冗費を節約して実父母の許に送り、その生活を補助した。一方、旧主松平家では家老市川の不正が発覚し、主君より再三懇望されたので妻子を連れ養家を離縁して帰参した。松平家は窮乏していたため、禄は興吉の時の半分で、かつ家老を置かず、興臧を用人の上席とする

のみであつたが、彼は日夜忠勤を励んだ。興也は和歌を詠じ文学的傾向が見えていたが、興臧は兵書・軍記等を愛読し、可蝶と号して俳諧を嗜んだ。大酒家で酒のために安永四年に吐血し、五十一歳で死亡した。彼は深川海辺橋の東、松平信成の邸中に住んでいた。妻の門との間に興旨・吉次郎・荒之助・興春・佐五郎(馬琴)・蘭・菊の五男二女があり、吉次郎・荒之助は早世した。馬琴たちの通つた寺子屋は、深川八幡一の鳥居辺の小柴長雄(三井親和の高弟)であつた。興旨は近習であるが、父なき馬琴一家は十七歳を頭に幼少の者のみで、後には興旨も浪人する。一家の困窮は極まつたが、母は娘時代に家庭的経済的に困苦の限りを体験して来た婦人だけあって、良くこの苦悩に堪えて子らを養育した。過労のために頭髮は半白となり、天明五年に享年四十八で歿した。貞淑な賢婦人で、非常なしっかり者らしく、特に夫と同様に文学を好み、子供らにも教えたほどで、文豪馬琴の穎才はむしろこの母より稟けるところが大であるように思われる。

長男の興旨は松平家を去つて後に山口和泉守直良に仕え、給禄拾五金月俸三口に塩・味噌・薪を加えて給与され、用人次席に進んだが、寛政十年四十歳で歿した。妻の添(戸田内膳の用人山田平兵衛の妹)との間に薦という娘があつた。東岡舎羅文と号して吾山を師とし俳諧に遊んだ。母思い弟妹思いで、戸田家の仕を辞したのも、主人に従つて甲府におり、願つても母の看病の日延をすることを許されなかつたためである。馬琴に対しては、親がわりとして常にこれを庇護し鞭撻した。

(昭和十四年一月)

凡 例

- 一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って嚴重に行った。
- 二、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。
 - (1) 本文に段落を設け、詞には鉤(「」)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。
 - (2) 冒頭の漢文の序の繫符(「」)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。
 - (3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。
 - (4) 原本の文章はすべて句点(。)で切つてあるが、それを読点(、)・句点(。・)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。
 - (5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察叡智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。
 - (6) 原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」・「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

(7) 馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「歟」その他を仮名書にした。「漁夫」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。

ぎよふ
リヤウシ

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻(小池藤五郎校訂、昭和十二・十六年刊)を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』(架蔵番号別三―一〇六一二)と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、逸・羣・晉・智など、いくつかを通行の漢字(逃・群・腰・胸)に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の()は原本の割注を示しているが、今回これを〔 〕に改めた。原本の欄外注は「」に収めた。一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

(岩波文庫編集部)

話の筋(第五卷の分)

〔第八輯〕(巻之五より巻之八下套まで)

千住河原で二人の盜賊に逢い、それを追った大角と現八は、穂北の豪族氷垣夏行に盗人と思われて捕えられた。しかし夏行の娘の重戸に救われ、遁れて千住河の船中で信乃・道節に会い、真の盜賊を捕えて身の潔白を証擧立てた。夏行は過失を詫び、自分は結城の殘党であり、婿の落鮎有種は豊嶋の殘党であると語り、四犬士を懇にもてなした。甲斐国の指月院に住む、大法師に穂北の事件を知らせようとして現八・大角は出発し、道節は氷垣家に逗留して五十子城の扇谷定正を窺っていた。大法師は結城の古戦場で念仏供養をする目的で甲斐国を発足し、途中武蔵国麻生の郷で妖賊鷲鰐坊を亡し、土民と老猫との難儀を救った。

大阪毛野は仇を捜すために、武蔵国湯嶋の郷の天満宮の境内で放下師となっていた。参詣に来た扇谷定正の室の蟹目上に認められ、忠臣河鯉守如から扇谷家の奸臣竜山免太夫を討つことを依頼された。この免太夫こそは毛野の父の仇籠山逸東太であった。

毒婦船虫は流れ流れて今は武蔵国司馬浜の辻君になり、客を殺して金子を奪っていたが、甲斐国から帰り道の小文吾に捕えられた。同行の莊介・現八・大角も追いつき、不思議にも信乃・道

節さえ来合わせ、六犬士は船虫を牛に突き殺させた。信乃・道節がここに来合わせたことは、明日ここで竜山免太夫を襲うはずの毛野の身を案じてであった。六犬士と落鮎有種とは、毛野が免太夫を討てば必ず兵を繰り出して来ると思われる扇谷定正に対して、道節・信乃の復讐戦の手筈をきめた。

〔第九輯〕（巻之一より巻之六まで）

文明十五年正月二十一日、小田原の北条家に使用する定正の寵臣竜山免太夫の一隊を、武藏国鈴茂林に待ち受けた毛野は、小文吾・莊介らの助力により多数の敵を斬り払い、遂に仇討の本懐を遂げた。免太夫が討たれたとの報に驚いた定正は、手兵三百余を率いて攻めて来たが、道節・現八・大角はあらかじめ落鮎有種の手の者を伏せて置き、これを一撃して潰走させ、道節は定正を追ってその兜を射落した。定正は辛くも忍岡の城に逃げ込んだ。信乃は二十余人の小勢で五十子城を占領し、恩恵を民に施し、去って穂北に帰った。七犬士は暫く穂北に潜んでいたが、結城の法会に出席するために揃って出発した。

館山の城主蓼田権頭素藤は山賊であったが、館山城主小鞠谷如満の悪政に乗じて民心を得、遂に城を奪ったのであった。彼は如満の愛妾朝貌・夕顔を寵愛したが、二人が病死したので、八百比丘尼妙椿に反魂の法を行わせた。妙椿が妖術で素藤に見せたのは里見義成の第五女浜路姫であった。姫の美しさに我を忘れ、里見家に結婚を申し込んで拒絶された素藤は、妙椿の計略に随っ

て義成の嫡子義通を捕え、館山城内にこれを幽閉した。義成は三千余騎をもって館山城を攻めようとしたが、我子が入質になっているので如何ともしがたく、徒に城を囲むのみであった。

伏姫の霊を祭るために富山に登った里見義実は、突然にも麻呂・安西の残党に襲われた。その時、大江親兵衛が忽然と現れ、「八犬士の随一」と名乗り、義実の危急を救った。

主要人物一覽(第五卷の分)

○大角・現八・信乃・道節・毛野・小文吾・莊介・親兵衛
 氷垣残三夏行

八犬士。

落鮎余之七有種

元は管領持氏の臣。結城落城の後、武藏国穗北に住み郷士となった。良く犬士を庇護した。
 豊嶋信盛の臣。主家没落の後、氷垣夏行に養われてその養子となった。犬士のために尽すところが多い。

重戸

氷垣夏行の娘。落鮎有種の妻。大角・現八の無実の罪を知って二人を逃した。

小才二 世智介 得手吉 夢介 壁藏
 尻肛玉河太郎 無宿猫野良平

壁藏 氷垣家の僕。

武藏国の千住河原・墨田河などを住処とする盗賊。信乃・道節に捕えられた。

鷲蟬坊 知雨老師

同一人。武藏国長阪山に住む盗賊。妖術をもつて農民を惑わしたが、大法師に退治された。

扇谷 定正

管領。鈴茂林の戦に敗れ、道節に追われて兜を射落された。

蟹目上(蟹目前)

定正の室。忠臣河鯉守如と謀って奸臣竜山免太夫を除かんとし、遂に自害した。

河鯉権佐守如

奸臣竜山免太夫を除こうとしたが計画が齟齬したので、責を負って自殺した。

放下屋物四郎

武藏国湯嶋天神境内の放下師。大阪毛野の仮の名。

竜山免太夫縁連
仁田山晋五

龍門鍋介既済
地上織平

河鯉佐太郎孝嗣

杉倉木曾介氏元

但鳥跖六業因

墓田権頭素藤
礪時願八業当

小鞠谷主馬助如満

碓谷沙八
朝貌

兎巷幸弥太遠親
夕顔

妙椿

定正の臣。実は籠山逸東太の妾名。武藏国鈴茂林で犬阪毛野に討たれた。
大塚の城主大石憲重の臣。免太夫と共に北条家へ使する途中犬士に襲われ、捕えられて斬られた。

越杉駱三(一峯) 鯉崎悪四郎猛虎
二階堂高四郎 三浦三佐吉郎
根角谷中二麗廉 猫田駟蘭二
定正の臣。北条家への使者。
定正

河鯉守如の孝子。父の屍を駕籠に乗せ鈴茂林で犬士と対陣したが、毛野に論されて退いた。

堀内蔵人貞行 荒川兵庫助清澄 東六郎辰相
里見家の四家老。
近江国胆吹山の盗賊の頭。京都の祭で捕えられて殺された。

但鳥源金太素藤 同一人。但鳥跖六の子。後に館山城主となった。
平田張盆作与冬 但鳥跖六の手下。素藤が館山城主となるや、招かれてその家来となつた。

上総国館山城主。家臣兎巷幸弥太に殺され、墓田素藤に城を奪われた。

上総国上普善村の百姓。楮九郎は沙八の子。
奥利本膳盛衡 浅木碗九郎嘉俱
小鞠谷如満の臣。

小鞠谷如満の妾。如満の滅亡後は墓田素藤の妾になった。
八百比丘尼。妖術をもつて墓田素藤を助け里見家に仇をする。実は富山に棲む牝

里見義通 さとみ よしみち
 小森衛門篤宗 こもり えもん あつむね
 梶野葉門 かしの はもん

狸の化身。
 里見義成の嫡男 よしなり ちやくなん
 諏訪神社に参詣し、梶田素藤の奸計によつて捕えられた。
 浦安兵馬乗勝 うらやすひょうまのりかつ
 田税力助逸友 たちからりきのすけはやとも
 苦屋八郎景能 くまや はちろうかげよし
 義通附の家来。
 諏訪神社の神主。

目 次

解 説

凡例・編集付記

話の筋(第五巻の分)

主要人物一覧(第五巻の分)

南総里見八犬伝(五)

八犬伝第八輯巻第五附録

南総里見八犬伝 第八輯下帙五冊総目録

第八輯巻之五

第八十三回

とくしつ
得失地を易て勇士厄に遇ふ
へんしう
片袖禍を移して賢女独知る

第八十四回

夜泊の孤舟暗に窮士を資く
逆旅の小集 妙に郷豪を徴す

三

第八輯卷之六

第八十五回

志を傾けて夏行四賢を留む
夢を占して重戸讖兆を説く

五

第八十六回

道節一再復讐を謀る
、大巧に妖賊を滅す

七

第八輯卷之七

第八十七回

天機を談じて老猷旧洞を惜む
蕉火を照して勇僧獺穴に入る

六

第八十八回

湯嶋の社頭に才子薬を売る
聖廟の老樹に従者猴を走らす

二三

第八輯卷之八上套

第八十九回

奇功を呈して義俠冤囚を寧す
秘策を詳にして忠款奸佞を鋤く

三五

第八輯卷之八下套

第九十回 司馬浜に船虫淫を露ぐ
閻羅殿に牛鬼賊を劈ぐ
……………一九九

第九十一回 鈴森に毛野縁連を撃つ
谷山に道節定正を射る
……………一八〇

八犬伝第九輯自叙

南総里見八犬伝 第九輯上套総目録

第九輯卷之一

第九十二回 二犬路を分ちて一犬を資く
孤忠鑣に携りて衆惡を訟ふ
……………二〇五

第九十三回 轎に坐して守如主を救ふ
川を隔て孝嗣志を演ぶ
……………二一九

第九輯卷之二

第九十四回 高暖の板橋に道節戦馬を放つ
五十子の城に信乃姓名を留む
……………二四七

第九十五回

頭鎧を梟て忠与凱旋す
鼓盆の悼み定正過を知る

二六六

第九輯卷之三

第九十六回

管領讒を容て良臣を疑ふ
郷土義に仗て大敵を俟つ

二六九

第九十七回

良將征せずして地を二総に広くす
兇賊心なくして自積悪を訴ふ

二七〇

第九輯卷之四

第九十八回

盗人の従者偷走りて盗に戮さる
賊巢に宿りて強人賊難を免る

二七三

第九十九回

素藤鬼語を聴て黄金水を施す
遠親邪説に惑て館山城を鬧す

二七五

第九輯卷之五

第一百回

旧党招に応じて土民益憂ふ
返魂術を異にして美人弥奇なり

二七五